

アラム語複合表現 kol-q°bēl dî の意味と機能¹⁾

守 屋 彰 夫

1. 問題の所在

アラム語 qbl は、「前部、正面」を意味する実詞 qbl から派生して独立前置詞としてか、前置詞 l と複合して lqbl という形態で複合前置詞として使用されるようになった。さらに lqbl は dy を伴って複合接続詞としての機能を果たすようになった。このような qbl の用例は今世紀初頭よりエジプトから出土した帝国アラム語の諸文献に見い出せる²⁾。一方、聖書アラム語にはそのような用例と並んで、前置詞 l の前に更に小詞 k が付加され、kl-qbl という独特の形態が発展した。この kl-qbl に dnh が伴って副詞としての機能を果たす用例は聖書アラム語にのみ見い出せる。しかし kl-qbl に dy が伴うときには、一般的に帝国アラム語の用例との並行関係から同じような複合接続詞としての意味や機能を果たしていると理解されてきた。ところが最近 J. W. Wesseliuss がダニエル書 2-6 章に 13 例現われる kl-qbl dy のうち 4 例は、通常考えられているようにこの複合表現を含む文に先行する文を結び付ける機能を果たしているが、残りの 9 例は、kl-qbl dy に先行する文よりも、この複合表現により新しい文節が導入され、むしろ次に続く接続詞 waw と一対になってまとまった思想を表現していると主張している³⁾。そこでわれわれは、帝国アラム語と聖書アラム語における qbl を含む表現全体を概観すると共に、果たして Wesseliuss の主張が受容可能かどうかを検討し、更に waw apodosis の並行例が聖書ヘブライ語の中にあるかどうか探ることにする。

2. 帝国アラム語における qbl の用例と分布

古アラム語には qbl は一切使われた形跡がない⁴⁾。それは帝国アラム語で

初めて実詞として現われ、やがて前置詞として使用されるようになる。以下では先ずこれらの例を取り上げ、それぞれの文脈の中でのその意味と機能を分析する。

- 1) קבלהם קמו אתם «君たちは彼らの傍らに立ちなさい。」(AP 38: 6)⁵⁾
- 2) זי לקבל בירתא «これはその砦の前にある。」(AP 26: 7)
- 3) בספנן לקבלה «彼の向かいにある船に」(AP 71: 24)

上の 3 例は qbl が場所的意味で前置詞として使用されている場合である。1) では動詞 \sqrt{qwm} と共に動詞句を形成し、字義通りには「傍らに立つ」だが、慣用的に「人に歩み寄る」、「人と妥協する」から「人を助ける」の意味で使用されている。2) では実詞 qbl「前、正面」が前置詞 l と複合してひとつの前置詞句「正面に」を構成している。3) は 1) と同様に人称接尾辞が qbl に付されているが、好意的な意味ではなく「反対、対立」の意味で使われている。

- 4) [זנה] לקבל ספרא «[[この] 文書に従って」(AP 15: 36)⁶⁾
- 5) ולקבלה «それに従って」(AP 8: 27)
- 6) לקבל זנה זי המרכריא אמרן «財務官らが言っている事由に従って」(AP 26: 23)

上の 3 例は孰れも場所的意味を離れて、基準や規範を明示する句を導入する機能を果たしている。それぞれ qbl に、4) では直ぐ名詞が続き、5) では人称接尾辞が付加され、6) では関係代名詞によってその内容が規定されている指示代名詞が続いている。その外では AP 43: 4; 82: 7, AD 6: 4.5, Segal 4: 2, [9]; 12: 1 の用例や、最近 Porten と Yardeni の二人がアヒカル文書が書かれる前にそのパピルスが既に会計文書として使用されていたのを発見し

再生させた中に見い出される定型句 **לקבל משחתה** 「その寸法に従って」 (3.7Cr2:5; 3.7Er1:16; 3.7Er2:19; 3.7Kr3.6; 3.7Jr1.5) の用例⁷⁾ は 4) と, AP 27:10 の用例は 6) と同じと見ることができよう。

- 7) **לקבל זי בנה הוה קרמין** 「それが以前に建てられていたように」
(AP 30:25//AP 31:24 [**זי** 以下は再構成])
- 8) **לקבל זי קרמין הוה מתעבר** 「以前に行われていたように」 (AP 32:10)
- 9) **לקבל זי ירכם מהשכחה הבו לה** 「君たちが出来る限りのものを彼に与えなさい。」 (AP 38:9)⁸⁾
- 10) **לקבל זי סבלתני** 「何故なら彼女が私を支えてくれたからだ。」
(BMAP 9:17)
- 11) **קבל זי לא כתב על ספר אנתתכי עם ענני בר חגי** 「というのはそれはあなたの妻としての身分 [結婚] 証書にハガイの子アナナイと共に書かれていないからだ。」 (BMAP 10:7)⁹⁾

これらの用法の特徴は **לקבל** に関係詞 **זי** が続き、全体として接続詞の機能を果たしていることである。『アヒカル』の物語部分にもこの **לקבל זי** が 2 回 (52, 68 行, 再構成の蓋然性 [24, 75 行] も含めれば 4 回) 使用されている。**לקבל זי קרמן פמון אבוהי הוה חשל** 「以前に彼の父パムンが支払っていたように。」 (AD 8:6) という構文は 8) のそれに極めて近い。AD 9:2 にも似た構文が現われる。11) では qbl の前に前置詞 l を欠くが意味と機能は 7)~10) と同じとみて差し支えない。

以上でアケメネス朝ペルシャ時代にエジプトで使われたアラム語 qbl の用例をほぼ網羅したことになる。この qbl が実詞としては稀にしか使用されず、上述したような前置詞や接続詞としての機能に集中して行った背景には恐らく qbl と競合関係にあると考えられる qdm の存在が指摘できよう。こ

ここで両者の語彙論的比較を展開する紙幅はないが、後者は動詞、実詞、前置詞としてそれぞれ十分な展開を遂げ、広範に使用されている¹⁰⁾。但し、上述した第二群と第三群のような意味機能は qdm には付着しなかったことだけを指摘しておきたい。

3. 聖書アラム語での用例とその分析

聖書ヘブライ語では、列王記下 15 章 10 節に一箇所だけ qbl が現われる。

וַיִּקְשֹׁר עָלָיו שָׁלֹם בֶּן-יִזְבִּישׁ וַיַּכְהוּ קִבְלָ-עַם וַיִּמְיֹתְהוּ וַיִּמְלֹךְ תַּחְתָּיו
「ヤベシュの子シャルムが謀反を起こし、民の前でゼカルヤを打ち殺し、代わって王となった。」(新共同訳)

この qbl が前節で扱ったアラム語と同様の意味と用法（殊に前置詞の付加されない I）を見よ）に理解されていることは明らかだが、ここに唐突に現われる qbl が元来のヘブライ語なのか、それともアラム語の影響で使われているのかは古来問題にされてきた。もしアラム語と同じように前置詞ならば עַם ではなく冠詞が必要で הָעַם となる方が自然だろう。又、マソラ本文伝承に問題があるとすれば七十人訳のある写本には ἐν Ἰεβλααμ とあり、これに基いて再構成すれば בִּיבְלָאֻם 「イブレアムで」となるだろう¹¹⁾。

さてヘブライ語を離れて聖書アラム語部分に移ると、qbl の用例は豊富になるが、前節で扱った用法の範囲内で説明できるものから見ていこう。

אַתָּה מֶלֶכָּא חָזָה חֲנִיָּהּ וְאַלּוּ צִלְם חַר שְׂגִיָּא צִלְמָא דְכֵן רַב וְזִינָה
יְתִיר קֶאֱם לְקִבְלָךְ וְרוּחַ דְּחִיל

「ああ王様、あなたがご覧になっていると、一つの大きな像が現われました。この像は巨大で、その輝きは卓越し、あなたの前に建ち、その外観は恐ろしいものでした。」

(ダニ 2:31)

この לִקְבֹּל に人称接尾辞のついた用例は下線を施した訳からも明らかなように、場所的意味で前置詞として使用されている場合で前節の第一群に相応する。これに類する用例は לִקְבֹּל צִלְמָא 「その像の前に」(ダニ 3:3), לִקְבֹּל נְבִיר שְׂתָא 「そしてその千人の前で」(ダニ 5:1), לִקְבֹּל נְבִיר שְׂתָא 「その燭台の向かい側の」(ダニ 5:5) である。

次に第二群の用法に当たる例を見よう。前範 4) の並行例として

לִקְבֹּל מִלִּי מִלְכָּא וְרַב־בְּנוֹהִי
「王とその貴族らの言葉の故に」

(ダニ 5:10)

を挙げることができよう。לִקְבֹּל דִּנְהָא 「この故に、その結果」(エズ 4:16) も前節 6) の例から説明できよう。

第三群の用例としては、

אֲדִין תִּתֵּנִי פִתַּח עֵבֶר-נְהָרָה שְׂתַר בּוֹזַנִי וּכְנֻתָּהוֹן לִקְבֹּל דִּי-שְׁלַח
דְּרִינֻשׁ מִלְכָּא בְּנִמָּא אֶסְפְּרָנָא עֵבֶרו
「そこで川向こう州の知事タテナイや、シェタル・ボズナイ、及び彼等の同僚たちは、ダレイオス王が書き送った事柄に沿っててきぱきとことを運んだ。」

(エズ 6:13)

を挙げることができよう。これは לִקְבֹּל דִּי で導かれる節が主語と動詞を分断していてやや複雑な構文になっているが私訳から判るように、前節の用例 7) や 8) の接続詞の機能の並行例と見ることができる。

このように聖書アラム語部分には、アケメネス朝ペルシャ時代のエジプトのアラム語の全ての用例が見い出されることが判明した(7例)。しかし聖書アラム語部分ではこのような用例はむしろ少数であり、qbl に前置詞 l が付加されたあと更に小詞 k が前置詞 l の前に付加され、それらが一体となって kl-qbl と綴られるようになった用例が 22 回も見い出される。以下ではこの表現法の意味と機能を詳細に検討するが、先ず最初に綴りとしては kl-qbl だが、これに dnh が伴った副詞的用法を見ておこう。この用例は先に検討したエズラ記 4 章 16 節の **לְקַבֵּל דְּנָה** 「この故に」の意味や機能と何ら変わらない。この **כָּל-קַבֵּל דְּנָה** は全部で 7 回現われる(ダニ 2:12.24, 3:7.8.22, 6:10; エズ 7:17)。孰れも前の文に対する論理的帰結や結論、結果を述べる文を新たに導き出す副詞的機能を果たしている。従って文脈に応じて「この故に」、「そうすると」、「すると(すぐ)」のような訳語を当てることができるし、場合によっては殊更に日本語に相当する訳語を当てなくとも文脈から十分な時もある。一例だけ分析してみよう。

**כָּל-קַבֵּל דְּנָה מְלָכָא בְּנִס וְקִצְף שְׂגִיָּא וְאָמַר לְהוּבְרָה לְכָל
חֲכִימֵי בָבֶל**

「すると王は怒り、憤激し、バビロンの知者を全て滅ぼすよう命令した。」

(ダニ 2:12)

この **כָּל-קַבֵּל דְּנָה** に先行する文節ではカルデア人たちが、王が王の夢の内容を語ってくれるよう繰り返し主張し、その夢が判らない以上その解釈を述べることは無理難題であり、要求に応じられる人は誰もいないと述べている。従ってこの **כָּל-קַבֵּל דְּנָה** がそのやり取をすべて踏まえた結果なのか、最後の無理だという返事の内容への直接的な反応かはともかく、**כָּל-קַבֵּל דְּנָה** に導かれる文が前文からの論理的帰結を導入しようとしていることは明らかである。他の 6 例についても同様の論理関係が **כָּל-קַבֵּל דְּנָה** を

挟む二つの文の間に見い出せる。従ってこの表現 **כָּל-קָבֵל דָּנָה** は先の第二群の **לִקְבֹּל** との並行表現からの発展型と理解して差し支えないだろう。ただ帝国アラム語での用法と異なり、聖書アラム語の用例の方が前後の文と文との論理関係をより一層明確に表現しようとして使用されているということは言えそうである。しかしながら、構文論の観点から見れば、**כָּל-קָבֵל דָּנָה** に導かれる文はそれに先行する文とは従属関係にはなく、独立した新しい文が導入されていることがここでの要点である。特に **כָּל-קָבֵל דָּנָה** に **בְּהַזְמָנָא** 「その時」が続くダニ 3:7.8 などを見ると前文からの独立性が一層顕著である。

次に、接続詞的用法と従来考えられてきた **כָּל-קָבֵל דָּי** の考察に移ろう。聖書アラム語でダニエル書に 13 回、エズラ記に 2 回、合計 15 回現われる。最初に「問題の所在」の節で言及したように、ダニエル書の用例に関しては既に Wesseliuss の詳細な分析があるので、その結論を先に紹介し、それから我々の議論を出発させよう。Wesseliuss はダニエル書 2:45, 3:29, 5:12, 6:11 の 4 箇所では使われている **כָּל-קָבֵל דָּי** は、従来考えられていたように、その前後の文と文を結び付ける接続詞の機能を果たしているが、残りの 9 例（ダニエル書 2:8.10.40.41, 4:15, 5:22, 6:4.5.23）は、**כָּל-קָבֵל דָּי** で始まる文が先行する文と構文上結び付いているのではなく、むしろ後続する接続詞 *waw* に導かれる文と一対になってまとまった思想表現となっていると主張する。つまり、接続詞 *waw* に導かれる文は、**כָּל-קָבֵל דָּי** で始まる文の結果を表示する帰結文となっているのだから、この *waw* は聖書ヘブライ語やエジプトのアラム語でその存在が確認されている *waw apodosis* の機能を担っていると仮定すべきだと言うのが Wesseliuss の言い分である。彼の分析例を絡紹介しよう。

וְאַנְתָּה בְּלִטְשָׁא צִר פִּשְׁרָא אֱמַר
כָּל-קָבֵל דָּי כָּל-חֲכִימִי מְלָכוּתִי לֹא-יִכְלִין פִּשְׁרָא לְהוֹדְעָתִנִי

וְאַתָּה כָּהֵל דִּי רוּחַ-אַלְהִין קְרִישִׁין בָּךְ

「さて、汝ベルテシャツェルよ、その解釈を語れ。

私の王国の知者は誰一人として私にその解釈を解き明かせないのだが、お前ならできる、お前には聖なる神々の霊が宿っているのだから。」

(ダニ 4:15)

Wesselius の分析によれば、第一行と第二行との結び付きは緩やかだが、第二行と第三行は共に /khl//ykl が使用されており、否定と強い肯定とで意味は逆で対比的だが、むしろ意味上も構文に関しても連関していると言える。従って、第一行の文はこれで完結させ、第二行目の כָּל-קָבֵל דִּי で始まる文と接続詞 waw で導入される第三行の文を相関させる構文理解が望ましい。第三行の接続詞 waw の用例は、聖書ヘブライ語に頻出する waw apodosis の用例や、初期アラム語でもその存在が推定されている waw apodosis の用例から説明できると Wesselius は主張する¹²⁾。この部分の新共同訳は細部はともかく構文理解に関する限り Wesselius の分析に一致しているので参考になろう。これに比較しうる用例を次に検討する。

אֱלֹהֵי שְׁלַח מַלְאָכָהּ וּסְגַר פִּם אֲרִיּוֹתָא וְלֹא חֲבִלוּנִי

כָּל-קָבֵל דִּי קְרַמּוּהִי זְכוּ הַשְׁתַּכַּחַת לִי

וְאַף קְרַמִּיךְ מִלְכָּא חֲבוּלָה לָא עֲבַדַּת

「私の神は彼の天使を送って下さいました。そして彼（天使）は獅子たちの口を閉ざしました。それで彼等は私に危害を加えませんでした。

神に対する私の無実が認められたように、

ああ王様、私もあなたに対して背いたことはございません。」

(ダニ 6:23)

第一行は出来事の報告であり、第二行は第一行の結果の解釈を提示して、第

三行の主張の根拠を導入し、逆に第三行は第二行を承けて王に対する主張となっている。従って第二行と第三行は内容上、密接な関係があり、形式上も前置詞 ל を共有している。但し、第三行も第一行末の主題への復帰、呼応（ここでは $\sqrt{\text{hbl}}$ を共有）を示している。

מִן־יָצִיב יָדַע אָנָּה דִּי עֲדָנָא אֲנִתּוּן זְבִינִין
כָּל־קָבֵל דִּי חֲזִיתוּן דִּי אֲזָדָא מִנִּי מִלְתָּא דִּי הֵן־חִלְמָא לָא תְּהוּדְעֻנִּי
תְּרֵה־הִיא דְּתִכּוּן

וּמֶלֶךְ כְּרָבָה וְשִׁחִיתָהּ הַזְמִנְתּוּן לְמֵאמֶר קִרְמִי עַד דִּי עֲדָנָא יִשְׁתַּנָּא
「お前たちが時間稼ぎをしようとしていることが私には明確に判っている。

もしお前たちがその夢を私に語るができなければ、お前たちの刑罰は唯一つあるのみだと言う私の言葉が確かなことをお前たちは見たので、

時が移るまで、お前たちは結託して私の前で虚言やでたらめを語ろうとしている。」

(ダニ 2:8-9)

第一行は全体の主題の提示であり、第二行にはその原因・理由の記述が続く、第三行は再び主題へ戻り、それを具体的に述べている。 כָּל־קָבֵל דִּי で導入される第二行は、続く第三行とは接続詞 waw で結ばれ、それぞれ理由付けと結論を構成しているので、この二行が密接に関連していることは判然としている。もっとも第一行と第三行では עֲדָנָא 「時間」と言う語が共有されており、それを含む文の動詞は異なるが含意されている事態は同一である事にも注意しておく必要がある（主題とその主題への回帰と結論）。

לָא־אִיתִי אָנֹשׁ עַל־יִבְשָׁתָא דִּי מִלַּת מִלְכָּא יוֹכֵל לְהַחֲנוּהָ
כָּל־קָבֵל דִּי כָל־מֶלֶךְ רַב וְשְׁלִיט מֶלֶךְ כְּרָנָה לָא שְׂאֵל

לְכָל-חַרָּטָם וְאִשָּׁף וְכַשְּׁדֵי

וּמַלְאָה דִּי-מַלְכָּה שְׂאֵל יִקְרָה וְאַחֲרָן לֹא אִתִּי דִּי יִחְוֶנָה

בְּרָם מַלְכָּא לְהֵן אֱלֹהִין דִּי מְדַרְהוֹן עִם-בְּשָׂרָא לֹא אִיתְּוֹהִי

「王様のお求めに応じることのできる者は、この地上には一人もおられません。」

いかなる大王も支配者も、占い師、祈祷師、賢者に、かつてそのようなことを求めたことはない程なので、

王様のお求めになっていることは難しく、王様に応じることのできる者は肉なる者と住まいを共になさらぬ神々の外には誰もおりません。」

(ダニ 2:10aβ-11)

第一行と第二行との間に何らかの関連を見い出すのは難しい。しかし
第二行と第三行は שְׂאֵל 「要求する」という語を共有しており、その程度の高さと実現の困難さを述べているので、自然な結び付き、関連を見い出せる。第一行の לֹא-אִתִּי אִנְשָׁא 「一人もおられません」と第三行の לְהֵן אֱלֹהִין … אַחֲרָן לֹא אִתִּי 「神々の外には誰もおりません」はそれぞれ並行する表現であり、第三行は第一行の主題への復帰として、その内容を詳述していると見ることができ、両者が密接に関連しているのは明らかである。

וּמַלְכוֹ רַב־עֲזָה תְּהוּא תְּקִיפָה כְּפָרְזָלָא

כָּל-קָבֵל דִּי פָרְזָלָא מְהֵרָא וְחָשַׁל כָּלָא

וּכְפָרְזָלָא דִּי-מְרַעַע כָּל-אֱלִין תִּדְק וְתִרַעַ

「そして鉄のように強い第四の王国が興るでしょう。

鉄がいかなるものをも粉碎し、打ち砕くように、

破壊する鉄のように、彼女(=第四の王国)はこれらすべてを粉碎し、破壊するでしょう。」

(ダニ 2:40)

当該節のマソラ本文伝承の問題には立ち入らず¹³⁾、それをそのまま受容して議論を進める。「鉄」という語は、すべての行に現われるので、この語を基準に三つの行の関連を云々することは出来ない。すると、第一行と第二行との間に構文上の連関は見い出せない。第二行は鉄の持っている破壊性と粉砕力とを詳述し、それらの性質から第四の王国に関する性格が引き出されている第三行との間には密接な論理的関係が指摘できよう。第一行と第三行は内容的にも第四の王国の記述であり、又、文法上も、動詞の性、数が呼応している。

וְדִי־חֲזִיתָהּ רְגֵלָא וְאַצְבָּעָתָא מִנְהוֹן חֲסַף דִּי־פָחַר וּמִנְהוֹן פְּרִזָּל
מְלָכוּ פְּלִיגָה תְּהוּהּ וּמִן־נִצְבָּתָא דִּי פְּרִזָּלָא לְהוּא־בָּהּ
כָּל־קָבֵל דִּי חֲזִיתָהּ פְּרִזָּלָא מְעַרְבַּ בְּחֲסַף טִינָא וְאַצְבָּעַת רְגֵלָא
מִנְהוֹן פְּרִזָּל וּמִנְהוֹן חֲסַף
מִן־קָצַת מְלָכוּתָא תְּהוּהּ תְּקִיפָהּ וּמִנָּה תְּהוּהּ תְּבִירָהּ

「そしてあなたが一部は陶工の陶土、一部は鉄からなる足と足指を御覧になりましたように、それは分裂王国です。しかし幾分か鉄の強さもその中にあります。

丁度あなたが柔らかい陶土に混ざっている鉄を御覧になりましたように、つまり、足の指が一部は鉄、一部は陶土であるように、その王国の一部は堅固で、一部は脆弱なのです。」

(ダニ 2:41-42)

第三行の冒頭に接続詞 waw がなく、その点に関しては形式的にはこれまでの構文とは異なるが、これまでの分析をそのまま応用すれば、先ず、第一行と第三行は第四の王国の記述であって相関関係にある。第二行と第三行は、部分的強さと部分的脆さとを併せ持つ王国の性格を導き出す比喩的根拠と結論と見る事が出来よう。語のレベルでは、並行する語が三行に亘って複雑に入り組んでおり、必ずしも第一行と第二行とを分けることは出来ない

が、第二行と第三行をわれわれのように解する見方は、論理構造を考えると、全体の把握に関する限り説得的と言えよう。

וְאַתָּה בֶּרֶךְ בִּלְשָׁאֲצַר לָא הִשְׁפַּלְתָּ לְבָבְךָ
כָּל־קִבֵּל דִּי כָל־דְּנָה יִרְעָךְ
וְעַל מָרָא־שְׁמַיָּא הִתְרוּמַמְתָּ

「さて彼の息子である、ベルシャツァルよ、あなたはあなたの心を謙虚にしなかった。

あなたはこれをすべてを知っていたけれども、
天の主にならなくてあなた自身を高慢にした。」

(ダニ 5:22-23)

一見すると、第一行目の「あなたはあなたの心を謙虚にしなかった」と第三行目の「あなた自身を高慢にした」が並行しているようだが、第一行目はむしろ父のネブカドネツァルについて言われている 20 節の רָם לְבָבָה 「彼の心を高くした」の方が、語法上も意味の対比上からも近いと言える。したがって私訳のように第一行目で段落が完結し、第二行は譲歩節で、第三行は接読詞 waw に導かれる帰結節として機能しているといえる。

אַרְיִן דְּנִינְאֵל דְּנָה הָנָא מִתְנַצַּח עַל־סָרְכִיָּא וְאַחַשְׁדַּרְפָּנִיָּא
כָּל־קִבֵּל דִּי רוּחַ יִתִּירָא בֵּיהּ
וּמִלְכָּא עָשִׂיתָ לְהַקְמוּתָהּ עַל־כָּל־מְלָכוּתָא

「さて、このダニエルは他のどの大臣や総督よりも傑出していた。
優れた霊が彼の中にあつたので、
王は全王国の上に彼を立てようとした。」

(ダニ 6:4)

第一行は事実の叙述であり、第三行はその事実に基く王の決断と言えよう。第二行を前後どちらの行と関係させるかは、簡単には決め難い。これを第一行と関連させれば、ダニエルの傑出している事実の論拠となろう¹⁴⁾。しかしダニエル書の著者は、「優れた霊が彼の中にあった」という文言を、王の認識の問題というよりむしろ事実として、第三行の根拠として提示したと考えられる¹⁵⁾。Wesselius は後者を支持する¹⁶⁾。

וְכָל-עֲלָה וְשִׁחִיתָהּ לֹא-יִכָּלֵין לְהִשְׁכָּחָהּ

כָּל-קֶבֶל דִּי-מְהִימָן הוּא

וְכָל-שָׁלוּ וְשִׁחִיתָהּ לֹא הִשְׁתַּכַּחַת עֲלוּהִי

「しかし彼らは如何なる告発の口実も過失をも見い出すことが出来なかった。

彼は誠実なので、

如何なる怠慢も過失も彼には見い出されなかった。」

(ダニ 6:5b)

使われている動詞が能動と受動の差異はあるが、第一行と第三行とは明らかに並行している。ここでも第二行を前後のどちらの行に関連させるかは、それほど自明ではない¹⁷⁾。しかし前後の行の相違を指摘するとすれば、それぞれの動詞が能動と受動の外に、語のレベルでは、עֲלָה「告発の口実」とשָׁלוּ「怠慢」との差異であり、第二行のמְהִימָן「誠実さ」が反対論拠になるのは敢えて言えば「怠慢」の方だろう。従って、この第二行と文頭に接続詞wawを持つ第三行とを論拠と結論として関係づけることはそれなりの理由があると言えよう¹⁸⁾。

以上でダニエル書での用例の分析が終わったので、次にエズラ記の二例の考察に移る。

כָּעַן כָּל־קָבֵל דִּי־מֶלַח הִיכְלָא מְלַחְנָא
וְעֲרֹת מֶלֶכָא לֹא אָרִיד־לְנָא לְמַחֲזֹאֵל־דְּנָה שְׁלַחְנָא וְהוֹרְעָנָא
לְמֶלֶכָא

「さて、われわれは王宮の塩を食む身であるから、
われわれは王の不名誉を見るのは忍び難い。それ故、われわれは王に
人を遣わし、お知らせするのです。」

(エズ 4:14)

これまで考察を進めてきたダニエル書の諸例の第一行にあたるものがここにはないので、形式的には必ずしも並行関係にはない。この節は従来、MTの句読法に従い、**עַל־דְּנָה** の直前までを一まとめに理由と取り、**עַל־דְּנָה** 以下を結論とする見解が支配的であった。しかし、上記のように二行に分けて、第二行冒頭の接続詞 *waw* 以下が結論部分を述べていると見る方がより論理的であることは明らかである。従って、われわれはこれもこれまで扱ってきたダニエル書の九例 **כָּל־קָבֵל דִּי**…**ו**… との並行例と看做することができる¹⁹⁾。

Wesselius は、われわれが先に「帝国アラム語における *qbl* の用例と分布」の中で部分的に扱った箇所に、これまで指摘してきた用例との驚くほどの並行関係の存在を見い出している (*BMAP* 9:16-18)²⁰⁾。すなわち、**לְקַבֵּל** …**אִי**… が字義通りではないが、**כָּל־קָבֵל דִּי**…**ו**… と内容的に並行関係にあると指摘している。本文と翻訳は以下の通り。

זנא ביתא זי תחומיה ומשחתה כתיבן ומלויה כתיבן בספרא
זנה אנה ענני יהבתה ליהוישמע ברתי במותי ברחמן
לקבל זי סבלתני ואנה ימין סב לא כהל הוית בידי וסבלתני
אף אנה יהבת לה במותי

「その境界と広さが書き記され、その言葉 (= 条項) がこの文書に書き

記されているこの家を、私アナナイは私の娘イエホイシマに私の死亡時に無料で遺贈します。

彼女は私が齢をとった時、私を支え、私が手を使えないとき、私を支えたその見返りに、

私も私の死亡時に彼女に（それを）与えます。」

(BMAP 9:16-18)

確かに Wesselius が言うように、第一行と第三行とが並行句で、第二行は理由付けとなっている。私訳のように後者を **וְאֵלֶּיךָ** で始まる第三行の論拠の提示とすれば、この場合の **וְאֵלֶּיךָ** の前には接続詞 *waw* がないが、先に取り扱ったダニエル書 6 章 23 節との構造上の類似は明らかである。

最後にエズラ記の第二例（7 章 14 節）を見よう。アルタクセルクセス王の書簡の中での用例で、前節（13 節）で王から「イスラエルの民、祭司、レビ人」へ、エズラとの同行許可が発せられたのを承けて、エズラの派遣目的が次のように明記される。

כָּל־קִבְלָהּ דִּי מִן־קִרְבָּנָא וְשִׁבְעַת יְעֻטָּהּ שְׁלִיחַ לְבִקְרָא עַל־יְהוּדָה
וְלִירוּשָׁלַם בְּרֵת אֱלֹהֵךָ דִּי בִידְךָ

「というのは、君の神の律法が君に委ねられているがそれに基づいてユダとエルサレムの事情を調べるために（君は）²¹⁾王と七人の顧問官によって派遣されるのだから。」

(エズ 7:14)

エズラの果たすべき任務が更に 15-16 節に不定詞句で付加されている。そして 17 節は先に言及したが、論理的帰結を導き出す **כָּל־קִבְלָהּ דִּינָה** で始まり、エズラの行うべき具体的行為が記述されている。このような記述の流れを見る限り、当該節には、われわれが議論してきた三行に亘る構文造を見い

出すことは困難で、ここでの כָּל-קִבְלָיִי は先行する 13 節への理由付けと理解すべきだろう。

4. 並木論文への応答

以上、われわれは Wesselius の主張をテキストに沿って詳しく検討した結果、彼の言うように כָּל-קִבְלָיִי の接続詞 waw は waw apodosis の機能を担っているという仮説を概ね承認できた。すなわち、三行に亘る文節構造のうち、内容的に第一行と第三行が並行句を構成し、第二行冒頭の כָּל-קִבְלָיִי は第一行の理由付けではなく、むしろ続く第三行の論拠を提示し、第三行冒頭の接続詞 waw がその結果、結論部分の導入の役割を果たしている、と考えられる共通の構造がダニエル書アラム語部分に集中的に見い出されるのである。この waw apodosis の機能については、Joüon が聖書ヘブライ語文法の中で、比較的詳細な記述を試みているので²²⁾、主に彼の記述をも参照しながら、創世記 4:14 での וְהָיָה לְךָ אֶלֶף וְיָמִים²³⁾ の用法²³⁾をどのように理解すべきか、これまで見てきた Wesselius の主張を踏まえて検討したい。原文²⁴⁾とその新共同訳、口語訳は以下の通り。

הַן גִּרְשָׁתָּ אֹתִי הַיּוֹם מֵעַל פְּנֵי הָאָרֶץ
וּמִפְּנֵיךָ אֶסְתָּר
וְהָיִיתִי נָע וְנָדָר בָּאָרֶץ
וְהָיָה כָּל-מִצְאֵי יְהִרְגֵנִי

「今日、あなたがわたしをこの土地から追放なさり、わたしが御顔から隠されて、地上をさまよい、さすらう者となってしまうえば、わたしに出会う者はだれであれ、わたしを殺すでしょう。」新共同訳

「あなたは、きょう、わたしを地のおもてから追放されました。わたしはあなたを離れて、地上の放浪者とならねばなりません。わたしを見付ける人はだれでもわたしを殺すでしょう。」口語訳

新共同訳は aa 冒頭の $\text{וְ$ を条件節の導入と取り、 ba までの最初の三つの文を条件節、最後の $b\beta$ だけを帰結文とする。口語訳は訳語を与えてはいないが同じ וְ を間投詞「見よ」と取り、 aa だけをこれと関連させ、 $a\beta$ 以下の三つの文を同列に並べている。これに対して、並木浩一教授は、七十人訳の $\epsilon\iota$ (ヘブライ語 וְ の訳語) を根拠づけを内実とする修辭的条件節の導入と取り、以下の訳を与えている。

「あなたが今日わたしを地のおもてから追放なさるので、
わたしはみ顔から隠されることになり、
呻き打ち震える者となり、
誰でもわたしを見つめる者がわたしを殺すでしょう。」²⁵⁾

この翻訳では、 aa が根拠づけで、 $a\beta$ 以下が帰結文となり、節全体の構造理解としては、口語訳と変わらないように見える。しかし、 aa を理由、根拠づけと把握し、それに続く $a\beta$ 以下 $b\beta$ までの三文を帰結文として関連づけた点は、節全体の構造理解を極めて明確に提示したと言えよう。そして、ここにこそわれわれがこれまで扱ってきた *waw apodosis* との接点がある。直接の言及はないが、事実上、 $a\beta$ から $b\beta$ までの冒頭の三つの *waw* は *waw apodosis* として把握されている。このような *waw* の機能については勿論、既に文法書などで指摘されている。例えば、Joüon-Muraoka²⁶⁾ で挙げられている例のうち、代下 7:13, ヨブ 9:11, 12; 12:14, 15; 23:8 などがわれわれの創 4:14 の例の確証となろう。このような条件節導入としての וְ の使用は明らかにアラム語の影響下にヘブライ語に入ったとされるが²⁷⁾、それは単語のレベルではなく、帰結文の *waw apodosis* をも併せた構文論のレベルでなされたことが、判明する。従って、並木論文での論拠づけとして וְ の理解は、 $a\beta$ 以下 $b\beta$ ままで *waw apodosis* によって構文論として継続されているとみることによって補完された、と言うことができよう。並木論文は文のみならず、さらに物語、テキストを超えた視座のレベルに亘って展開され

ているが、なによりもそれらの基礎をなす文のレベルで拙論が多少の貢献をできたのであれば、幸いである。

もう一点、並木論文のなかで見落とすことのできない鋭い洞察がある。われわれは先にダニエル書 6 章 23 節と *BMAP* 9:16-18 で、理由づけ、論拠が וְהָיָה で導入された後、帰結文が וְאַתָּה で続けられる構文を考察したが、この点についても七十人訳の *ei* の分析を通して同様の考察がなされている。論拠とされているテキストはヨブ記 4:18-19; 15:15-18; 25:5-6 が孰れも $\text{וְאַתָּה...וְהָיָה}$ という構文を示し、理由、根拠が וְהָיָה によって導入された後、帰結節が וְאַתָּה によって強調的に表現された意図的修辞法となっている²⁸⁾。これら三例の原文と、われわれのこれまでの考察に基く私訳を提示して本稿を締め括ることにしたい。その際、当該の三例は、どれも構文上、疑問文が先行する三行構成になっているので、それぞれをもう一節ずつ遡って全体を考察の対象とする。すると、第一行の疑問文とそれに対する否定内容の答えの第三行とがそれぞれ内容的に照応し、第二行が第三行の否定的論拠、理由づけとなっている共通の構造が見えてくる。ここで筆者は、先に考察した $\text{וְאַתָּה...וְהָיָה}$ とここでの $\text{וְאַתָּה...וְהָיָה}$ との言語上の関連を主張する意図は全くない。ただ、このような第二行と第三行との論理的関連の偶然的一致の背後には、恐らく聖書ヘブライ語における *waw apodosis* の伝統とともに、両者に共通の思考法の存在が想定されてしかるべきだろう。

הָאָנוּשׁ מֵאֵלֹהִים יִצְדָק אִם מַעֲשָׂהוּ יִטְהַר-גִּבּוֹר

הֵן בְּעֵבְרָיו לֹא יֵאָמֵן וּבְמַלְאָכָיו יִשִּׁים תְּהִלָּה

אִךְ שִׁכְנִי בְּתִי-חֹמֶר אֲשֶׁר-בְּעָפָר יְסוּדָם יִרְכָּאוּם לִפְנֵי-עֹשֶׂה

「人は神より義しかろうか、人間は造り主より清かりうか。

彼は自分の僕たちを信じず、自分の天使たちに責めを科すのであるから、

まして土くれの家に住み、その元を質せば塵であり、衣蛾のように押し潰される者は。」

(ヨブ 4:17-19)

מָה-אֲנוֹשׁ כִּי-יִזְכֶּה וְכִי-יִצְדָּק יִלּוֹד אִשָּׁה
הֵן בִּקְרָשׁוֹ לֹא יֵאֱמִין וְשָׁמַיִם לֹא-זָכוּ בְּעֵינָיו
אִף כִּי-נִתְעַב וְנֶאֱלַח אִישׁ-שָׁחָה כַּמַּיִם עוֹלָה

「人はどうして清かろうか、女から生まれた者がどうして義しかろうか。

彼はその義しき者を信じず、天も彼の眼には清くないのだから、
まして厭うべき汚れた者、不義を水のように飲む人は。」

(ヨブ 15:14-16)

וּמָה-יִצְדָּק אֲנוֹשׁ עִם-אֵל וּמָה-יִזְכֶּה יִלּוֹד אִשָּׁה
הֵן עַר-יָדָם וְלֹא יֵאֱהִיל וְכוֹכָבִים לֹא-זָכוּ בְּעֵינָיו
אִף כִּי-אֲנוֹשׁ רָמָה וּבֶן-אָדָם תּוֹלָעָה

「人はどうして神の前に義しかろうか、女から生まれた者がどうして清かろうか。

月すら輝かず、星も彼の眼には清くないのだから、
まして蛆のような人、虫けらのような人の子は。」

(ヨブ 25:4-6)

略 号 表

- AD G. R. Driver, *Aramaic Documents of the Fifth Century B.C.*
(Oxford: Clarendon Press, 1957 [Abridged and Revised Edition])
- AP A. Cowley, *Aramaic Papyri of the Fifth Century B.C.* (Oxford: Clarendon Press, 1923)
- BDB F. Brown, S. R. Driver, C. A. Briggs, *Hebrew and English Lexicon of the Old Testament* (Oxford: Clarendon Press, 1907)

- BMAP* Emil G. Kraeling, *The Brooklyn Aramaic Papyri: New Documents of the Fifth Century B.C. from the Jewish Colony at Elephantine* (New Haven: Yale Univ. Press, 1953)
- DISO* Charles-F. Jean and Jacob Hoftijzer, *Dictionnaire des inscriptions sémitiques de l'ouest* (Leiden: Brill, 1965)
- DNWSI* J. Hoftijzer and K. Jongeling, *Dictionary of the North-West Semitic Inscriptions* (Leiden: E. J. Brill, 1995)
- Segal J. B. Segal, *Aramaic Texts from North Saqqara* (London: Egypt Exploration Society, 1983)
- TAD 1* Bezalel Porten and Ada Yardeni, *Textbook of Aramaic Documents from Ancient Egypt 1. Letters* (Jerusalem, 1986)
- TAD 2* Bezalel Porten and Ada Yardeni, *Textbook of Aramaic Documents from Ancient Egypt 2. Contacts* (Jerusalem, 1989)
- TAD 3* Bezalel Porten and Ada Yardeni, *Textbook of Aramaic Documents from Ancient Egypt 3. Literature·Accounts·Lists* (Jerusalem, 1993)

〔注〕

- 1) この論文は、同題で 1995 年 5 月 24 日に日本旧約学会で口頭発表した内容を当日の質疑応答を踏まえ、新たに書き下したものである。当日、司会をして下さった関根清三氏並びに質疑に参加した同僚諸兄に感謝いたします。
- 2) 大部分のテキストが現在刊行中の *TAD 1, 2, 3* に収められている。
- 3) J. W. Wesselius, "Language and Style in Biblical Aramaic: Observations on the Unity of Daniel II–VI," *VT* 38 (1988): 194–209.
- 4) *DISO, DNWSI* の当該項目を参照。
- 5) 以下テキスト番号は *AP* に拠るが、新しい *TAD* の読みを採用した場合はその都度注記する。
- 6) *TAD 2*, p. 30. 抹消された箇所だが Porten と Yardeni によってこのように復元された。
- 7) 会計文書の発見の経緯とその内容の分析に関しては、Ada Yardeni, "Maritime Trade and Royal Accountancy in an Erased Customs Account from 475 B.C.E. on the Ahīqar Scroll from Elephantine," *BASOR* 293 (1994): 67–78. テキスト番号は *TAD 3*, pp. 82–193 に依拠。
- 8) *TAD 1*, p. 58.

- 9) TAD 2, p. 90. Kraeling は部分的には正しく読んでいたが, קבל² を認識するまでには至らなかった. DISO, s.v. קבל^{II} (p. 249) を参照. DNWSI, Part 2, qbl₃ (p. 981) をも参照.
- 10) DISO, s.v. קר^I, קר^{II}, קר^{III} (pp. 251–252) を参照. DNWSI, Part 2, s.v. qdm₁, qdm₂, qdm₃ (pp. 986–991) をも参照.
- 11) 口語訳はマソラを読み替えるこの読みを採用している. BDB s.v. קבל (p. 867) を参照. 地名「イブレアム」については王下 9:27 を参照. Wagner は語根 qbl はセム諸国に広範に見い出されるので古ヘブライ語にも存在したと推定する. エゼキエル書 26 章 9 節の קבלו (新共同訳「[彼の] 破城槌」) も「何か前にあるもの」の原意から派生したと考えられている. Max Wagner, *Die lexikalischen und grammatikalischen Aramaismen im alttestamentlichen Hebräisch* (Berlin: Verlag Alfred Töpelmann, 1966), pp. 99–100.
- 12) Wesselius, “Language and Style in Biblical Aramaic,” p. 196.
- 13) LXX, Theod., Syr., や Vulg. には וְכַפְּרָא וְיִמְרָעָה に該当する句が存在しない. 又, קל-אלין を先行する分詞の目的語ととるか (MT), われわれの試訳のように後続する動詞の目的語ととるか, などの問題が存在する.
- 14) 以下の Tanakh~The Holy Scriptures (The New JPS Translation, 1988) の訳がこの立場に基づく. “This man Daniel surpassed the other ministers and satraps by virtue of his extraordinary spirit, and the king considered setting him over the whole kingdom.”
- 15) 近代社会に生きるわれわれにとっては, 「優れた霊が彼の中にあった」というような発言を事実として受容するにはかなりの無理を感じざるを得ない. しかしこの古代の著者にとっては, 主観的認識の問題ではなく, 簡明な事実であったのだという想像力を働かせることが重要だろう.
- 16) Wesselius, “Language and Style in Biblical Aramaic,” p. 200.
- 17) 多くの翻訳は, 接続詞 waw で結び付けられた第二行と第三行とを共に第一行の論拠としている. われわれの口語訳 (1955 年) を代表例として以下に掲げる. 「(彼らは) 訴えるべきなんの口実も, なんのとがをも見いだすことができなかった. それは彼が忠信な人であって, その身になんのあやまちも, とがも見いだされなかったからである.」
- 18) Wesselius, “Language and Style in Biblical Aramaic,” p. 202.
- 19) Ibid., p. 203.
- 20) Ibid., p. 203.
- 21) 主語の明示がない. 同じ分詞で主語の明示されている例は, מן מלכא שליח על ארשם (AP 21:3) に見ることができる.
- 22) P. Paul Joüon, S. J., *Grammaire de l' Hébreu biblique* (Rome: Institut biblique pontifical, 1947), § 176 (pp. 529–532). Joüon, Paul, S. J., *A Grammar of Biblical Hebrew*, Translated and Revised by Takamitsu Muraoka (Rome: Editrice Pontificio Istituto Biblico, 1993), Volume 2, § 176 (pp. 646–649). 以下われわれの引用は, 後者の改訂版に拠る. 帝国アラム語での waw apodosis の用例については, P. Grelot, “Le waw d'apodose en araméen d'Égypte,” *Semeia* 20 (1970), 33–39 を参照.
- 23) 発表の後で, 並木浩一会長より創世記 4:14 の …יְהוָה の接続詞 waw についての質問があり, 筆者はこの問題へ答える義務をずっと感じていたが, 適当な機

会がないまま、今日に至った。不明を詫びるとともに、議論の進展に役立つことを願っている。この箇所を中心テーマとした並木浩一論文は、「追放されたカイン」、『ペディラヴィウム』33 (1991 年), 1-21 ページ。

- 24) この節は四つの文から構成されている。MT は第二行目で前半、後半に分け、それぞれを一文ずつに細区分している。聖書学の伝統に従い、それぞれの文を、順に aa , $a\beta$, ba , $b\beta$ とする。
- 25) 並木浩一「追放されたカイン」, 8 ページ。
- 26) *A Grammar of Biblical Hebrew*, § 167, 1; p. 631. これらはどれも וְ が条件節を導く小詞として使用されている例として挙げられているが、しかし、どれもその後に *waw* が読み、その *waw* をわれわれは *waw apodosis* として理解されうると考えるのである。尚、Joüon-Muraoka には וְ に *waw apodosis* が読くとする明確な記述はない。両者は別々に扱われている。
- 27) 同。D. M. Stec は、(1) アラム語の影響の外に、(2) ヘブライ語では稀だが、セム諸語に見い出される条件節を導き出す小詞、(3) וְ 「見よ」の特殊用法ないし派生型の可能性を示唆している。彼の論文“The Use of Hên in Conditional Sentences” (*VT* 37, 4 [1987]), pp. 478 f. を参照。Stec はこの論文で条件節を導き出す וְ を詳述しているが、彼もこの וְ と *waw apodosis* との関連には特に触れていない。例えば代下 7 章 13-14 節の分析 (p. 485) でも両者の関連に注意すれば、 וְאֵלֵינוּ ではなく、 $\text{וְאֵסְלַח$ で帰結節が始まるような翻訳が可能になったであろう。又、その方が MT の句読法に合致しているのである。したがって当該箇所は正しくは次のようになろう。“and I will hear from heaven, then I will forgive their sin and heal their land.”
- 28) 並木浩一「追放されたカイン」, 7-8 ページ。ここでは考察の対象としないが、箴言 11 章 31 節の $\text{וְיָשְׁלַם אֶת כִּי־רָשָׁע וְחַוָּטָא}$ も上記三例と同一の構造を持つので、 וְ に導かれる節が論拠を、 אֶת כִּי 以下が帰結を示すとも解釈可能だろうが、ここではむしろ、 וְ を仮定的な意味に取るのがよいだろう。一応の私訳を示せば「もし義なる者がこの世で報いを受けるとすれば、まして悪しき者、過ちを犯す者はなおさらだ。」となる。